

『手紙』 ～ 願い ～

前略 専門職の皆さんへ

私、88歳、男、アウルで生活して5年が経つ。これは、私の叫びというか、世の中に言いたい願いでもある。私は、ゴミを集めるのが使命？というか、あんた方介護する人の中では「収集癖」と言うやっかいな事のようなのだが、私にとっては趣味というよりリサイクル活動のようなものなのである。そんな集めたゴミを勝手に捨てられてしまえば、誰だって嫌な気持ちになる。ちょっと怒ったら、あんた方は「暴言」だの、「暴力行為」だのと言う。今回は、そんな趣味が高じてもの作りに発展していった話を、家（うち）の社長を通してお伝えしてもらうことにした。

一般的に世間では私のような年寄りを「ボケ」老人という。専門的には「認知症高齢者」って言うみたいだ。しかし、私は叫びたい。そんなボケ老人にしたのは、あんた方介護をする人ではないか。社長にもよく言う。私達にだって考える力はある。感じる力だって、行動力だってある。それを、全部あんた方、介護をする人がやってしまう。年寄りを大事にするということを、あんた方は履き違えている。大事にするということは、何でもかんでもやってあげることじゃない。人間楽を覚えるとそれに慣れてしまうものである。それは、私達の弱さでもある。それは認める。ましてや年寄りだ。そんな機会を奪わないで欲しい。私は、昔ブリキ職人として働いた。自転車屋もやった。自転車の修理の手際よさを気に入られて、国鉄でも働いた。退職して、町内会の仕事をした。在家の坊主もやってる。今でも葬式でお経も読む。なんでも自分にできることはしてきた。でも、年を取ってくると記憶が定まらなくなってしまうことが、度々起きるようになった。心臓もいいほうじゃない。フランドルテープって言うのを貼っている。目も片方はほとんど見えない。世間で言う、身体障害者だ。手帳もある。それが、ある日突然「ボケ」だと言われて見れ、びっくり仰天だ。それでも、自分でしたいという願望は今でもなくなる。社長が、ブリキ職人だった頃の道具を持ってこいと言うので、部屋に持ち込ませてもらった。その道具を使って、あらゆる物を創作した。もちろん、ゴミでだ。今日は、その一例を紹介する。社長にはいつも言っている。全国に広めて欲しいと。こんなにできる年寄りも、日本には五万といることを。伝えて欲しい。私達にできることを奪わないで欲しい。伝えて欲しい。私達にも感じる力はあることを。伝えて欲しい。私達にも、行動力があることを。できれば、あなた方の専門性を、そのことに生かせるよう研究して欲しい。いつかあなた方もそこにたどり着くだろうから。

今日は、ひとつ皆さんに私が創作した物を作ってもらよう社長にお願いした。それを是非お土産に持って帰って欲しい。全国にいる人たちに知らせて欲しい。それが私の願いだ。こうやって頑張っている年寄りもいるということ。

お手紙読んでいただいて、ありがとうございました。皆さんも御身体ご自愛下さいませ。

（この手紙はご本人と協同で考え執筆したものであり、内容及び発表することについては、本人の同意を得ているものであります）